

ロンドン五輪で見られたソーシャルメディアの利用に関する研究

A study about people using Social Media in London 2012 Olympics

1K10C243 滝沢 航平

主査 宮内孝知 先生

副査 石井昌幸 先生

【第1章 序論】

2012年ロンドン五輪大会では、日本勢の獲得メダル総数は38個と史上最多だった。そして、このロンドン大会は、フェイスブック、ツイッターといったソーシャルメディアが本格的に普及してから初の五輪大会でもあった。ロンドン五輪でのソーシャルメディアの活用状況を把握し、今後のスポーツシーンでどのように人々へ変化をもたらしていくのか展望することが本研究の目的である。

【第2章 ソーシャルメディアとは】

この章では、ソーシャルメディアとは一体何なのか、またどのような経過をたどってきたのかという点を整理する。

ソーシャルメディアとは、「ユーザーが情報を発信し、形成していくメディアのこと」(プレスリリース IT, 2010年4月22日掲載)である。インターネット上で展開される情報メディアであり、情報の発信者と受け手が固定されていないということが最大の特徴とされる。また、人の結びつきを利用した情報流通などの社会的な要素を含むという点においても既存マスメディアとは一線が引かれる。

【第3章 ソーシャルメディアはどう活用されたか】

五輪の話題がソーシャルメディアで大きく取り上げられた理由として、五輪を運営する国際オリンピック委員会 (IOC) 自身が積極的にソーシャルメディアを活用したことが考えられる。

ロンドン五輪期間中に出された新聞や雑誌の記事から当時の五輪とソーシャルメディアのつながりや状況を分析した。状況を把握、分析しやすいように3つの立場(①選手、②観客／一般人、③報道関係者)に分けて研究を進めた。

日本代表選手の43%にあたる125人がブログを含むソーシャルメディアを利用しており、選手が自ら発信することにより、選手一人ひとりがメディアそのものになりえるという可能性を示した。また、観客／一般人に関して電通総研の事前調査によれば、2008年北京五輪開催期間中にテレビなどで観戦しながらソーシャルメディアを利用した人は全体の5.5%だったのに対し、ロンドン大会では15.7%の人が「利用する」と回答したという。さ

らに、報道関係者に関しても多くの活用が見られ、朝日新聞社では、ソーシャルメディアに本格的に取り組む手段として2012年1月より「つぶやく記者」制度が導入された。取材先が飛躍的に広がり、自分の記事を伝えてくれる人を増やすことも、反響や関係者の動きをリアルタイムに受け取ることも可能となった。

【第4章 ソーシャルメディアの弊害】

ロンドン五輪で見られたソーシャルメディアの利用は、多くの場面でプラス方向に働き、活用されていた。しかし、必ずしもメリットだけをもたらしていたわけではなく、逆に弊害も生み出した。

具体的には、選手がツイッター上で差別的発言をし、出場資格を剥奪された事例や一般人の中には、必要以上に選手や大会関連の情報が流れ込んでくることから、ソーシャルメディアに対して敬遠姿勢をとるなどの事例が見られた。また、テレビ界としては視聴率の獲得に苦戦を強いられ、ソーシャルメディアの利用者をいかに取り込むか、相乗効果を生み出していけるかという点に課題が残った。

【第5章 結論と今後の展望】

ロンドン五輪の中で、特性を最大に生かしたのはツイッターである。ツイッターは、即時性や情報発信のしやすさから、選手、一般人、報道関係者などあらゆる立場の人々に利用された。試合会場や練習会場から選手が持ち込んだスマートフォンやモバイル端末を利用し、アスリートたちのライブ感溢れる声がファンのもとに届けられたということは、これまでに例を見ない画期的な情報発信の形となった。

全体として「ソーシャリンピック」は好調な滑りだったといえる。研究を進める中で、新しいことに挑戦するときや、その新しいことが普及拡大していく途段階で、取り組むべき課題や失われるものが出てくるのは、当然のことだと感じた。スポーツシーンでも広がりを見せつつあるソーシャルメディアの場合も例外ではなく、様々な弊害が見られた。この先、ソーシャルメディアの活用をさらに増やしていくのか、これまで通りのマスメディア中心の情報伝達をとるのかというのは、一人ひとりに選択権が与えられている。その中で一番良い形を総合的に判断する時代の到来を迎えている。